

役員*企業*訪問

第42回 本会 黒木義彦理事 (福岡県建設業協同組合 理事長)

今回は、黒木理事が代表取締役を務める株式会社黒木建設を7月下旬に訪問しました。株式会社黒木建設の設立経緯に加えて、女性の活躍、社会への貢献等について語っていただきました。



黒木義彦理事
(福岡県建設業協同組合 理事長)

企業概要

企業名：株式会社黒木建設
設立：昭和42年11月 (創業：昭和31年4月)
代表者：代表取締役 黒木義彦
所在地：〒812-0006
福岡市博多区上牟田1丁目22番6号
TEL：092-411-7300
FAX：092-411-7316

建設業のイメージを変える

—こちらはお父様の代からですね。

黒木：そうです。父親はもともと大工でしたが、その後独立して昭和31年に黒木組というのを作ったのが始まりです。

—HPを拝見しますと、最初はこの業界がいやだったと書かれています。

黒木：まず建設会社に就職して現場監督をやっていたんですが、日に焼ける、ハードな現場、そして酒飲み、というその繰り返りで、俺の未来に希望は無いな、みたいな感じでした。ただレールは敷かれていたので、やめるわけにはいかないわけです。だから、建設業のイメージを変えたいという思いがめちゃくちゃありましたね。

27歳の時に常務として会社に戻ってきたのですが、現場監督しかしていなかったのが、財務とか全然わからなくて、それである勉強会で財務の勉強をしたとき、先輩の公認会計士にうちの決算書を見てもらったんです。そうすると、使途不明

なお金があるということで、精査すると実は債務超過の状態になっていたのがわかりました、それで会社を潰すのか、それとも継続するのかの岐路に立ったのですが、自分がやるんだったら父親の後継というより、自分がイメージする会社を作り変えるしかないなと思って、それから自分で方針や経営理念も作りました。

—そこから博多の文化を継承した家づくりがはじまったんですね。

黒木：山笠にも出ていましたし、博多の町と祭りが好きだったので、この町に適した住宅を作りたい、狭小地に、木造三階建てのうなぎの寝床みたいな二世帯・三世帯同居の家を作るのがいいなと思って、「ロジ (=路地) ハウス」という事業を立ち上げました。しかし、自分たちが理想としている住宅を、博多の人たちが受け入れてくれるのかということ、それも難しかったですね。それから15年近く経ちますが、20棟近くは建てました。



ロジ (=路地) ハウスについて説明する黒木理事

女性社員の活躍

—こちらは、一級建築士などの資格を持たれた方が多いですね。

黒木：一級を持っていた社員が病気とか退職とかで2人辞めたんですが、その前は一級建築士が6人いました。

今、女子チームで住宅の新築とリフォーム事業をやっています。打ち合わせから設計施工まで全部担当するんです。うちの会社は経理2人、設計が3人、不動産が1人、合計6名が女性ですが、

この女性陣がすごく元気がいいんです。

男性の設計事務所のかたは、デザインとか自分の作品づくりを一生懸命されるんですが、機能性とか維持管理の面はどうなのか、という視点から見ると、女性社員のほうが現実的です。

—事務所に入った時、若い女性が多くてファッションも自由で明るくて、いい雰囲気だと感じました。

黒木：世の中と一緒に、うちの会社も女性が引張っています。遠方から通勤している社員や子育て中の社員もいますが、そこは出社を遅らせたり早めたり、あるいは在宅でリモートでも仕事をしたりして融通を利かせています。

お客様は圧倒的に30代の方が多いので、子供のいる2人が対応すると、お客様のほうもちょうど同じくらいの子供さんがいらっしやったりして、向こうからもいろいろと意見を出されて、とてもいい感じです。



明るい事務所で様々なアイデアが生まれています

—社員教育にも力を入れておられますね。

黒木：うちの仕事は、自然の素材を使って人が作るので、感性や価値観が問われます。だからそういう方面の勉強をしないといけないと思って、きのうどんなことに感謝したのか、どんな気づきがあったのか、朝30分くらいコミュニケーションの時間を取っています。発表する場でもあるし、共感する場にもなっている、と思っています。

お客様のうわべのことばだけを聞いても、その求めているものは何か、その原点は何か、ということまで考えないと、はたして提案を受け入れてもらえるのか、という問題があります。仕事以前にそういう傾聴能力やコミュニケーション力が問われると思います。

社会にどう貢献していくのか

黒木：昔は「企業は社会の公器」とか聞いても、何が公器だ、とか考えていました。そんな余裕なんてないや、と思っていましたが、最近、会社として、社会のなかである役割を果たしていくようになる、社員も変わってお客様の層も変わってくるのを実感して、そういうことって大切なんだ、と気づきました。

—今の若い人たちは豊かな時代に育っているので、報酬だけでは働き甲斐を感じなくなっていますね。

黒木：そう思います。何をもって社会に貢献しているのか、と尋ねられたときに、どう答えるのか、ということが重要になっています。

今度中央区に土地を取得したので、自社でデザインをしたガレージハウスの三世代住宅を作る予定です。タウンハウスという形式で、2棟が1棟になったようなマンション感覚の戸建て住宅ですね。今まではお客様から受けた仕事为主だったんですが、これは自社で蓄えたデザイン力や価値観、それから断熱技術などを組み込んで作る予定です。

それと、東京にもよくありますが、若者がセンスのいい古民家で、ちょっとおしゃれな雑貨屋さんとか和菓子屋さんやケーキ屋さんの店舗を営むような場所を作りたいと考えています。今2箇所抑えているところがあるんですが、若い人たちが出店しやすいような立地で、昔の景観がちょっと残ったような空間を作りたいですね。天神、博多駅周辺では、若い人も大変ですから。

これは、来年以降5年間くらいのプロジェクトです。私は今65歳ですが、これが最後のプロジェクトになるかな、と思っています。後継者は32歳の甥で、5年後には私が社長になったのと同じ年齢になります。

インタビューを終えて

「企業の社会的責任」ということばが広く知られるようになってからずいぶん時間が経ちましたが、ほんの10年位前までなにか絵空事のような感もありました。しかし、現在パーパス経営やデザイン経営という考え方も浸透してきて、「何のために存在するのか」という企業の理念が問われる時代へと変化しています。理事長は、「会社のあり方が変われば社員が変わり、お客様の層も変わってくる」と話されましたが、長い間の現場経験に基づくことばとして、たいへん重く受け止めました。

(中小企業診断士 藪田久恵)

